

宋元版禅籍研究 (一)

——『五燈会元』——

一 『五燈会元』の古版に関する研究は、すでに胡適博士による『胡適手稿』第八輯中における九編の論致が存し、一九六〇年六月より一二月に及ぶ研究の移推と論旨の展開が示されている。博士が用いた『会元』の古版は、台北の中央圖書館所蔵の宋版(零本)と、同じく中央研究院所蔵の元の至正二四年版(零本)、及び求古楼所蔵の五山版と幾種かの明版等である。限られた資料で最大の学問的成果をものされた労は多とするが、未見の有力な古版類が本邦には存在しているので、ここにあえてそれらの紹介と検討を行ない、もつて博士の研究を補足したいと思う。

二 『会元』の宋版は本邦では宮内庁書陵部に二本がある。その書誌的概要は『書陵部典籍解題』に所載される。共に欠本があり、一は一八冊(卷八・九欠)、他は一五冊(卷一・四・五・八・九欠)であるが、精査すると二本は完全に同一版である。序跋や刊記がないため、その刊行年次は不明であるが、

椎 名 宏 雄

宋帝諱を闕画して「廓」字に至り、南宋の寧宗(一一九四～一二三四在位)の名を避諱する。この書陵部本中にみられる多くの刻工名は、胡適の紹介する中央圖書館所蔵の宋版の刻工名と完全に一致するから、これらはすべて同一版であろう。

かくて、現存する宋版三部は、いずれも欠巻を有するとはいえ、序跋をとどめぬ点でも共通し、その開版時に果して序跋が存在したか否かは速断を許さぬ。しかるに、本邦貞治七年(一二三六)京都建仁寺刊行の五山版の『会元』は内閣文庫等に所蔵され、それぞれ欠紙や補写の部分があるが、総合すると初刻時の構成は次のごとくであつたことが知られる。

- | | | |
|-----------------|-----------|-------|
| (1) 淳祐十二年(一二五二) | 大川普濟の題辭 | 一紙 |
| (2) 宝祐元年(一二五三) | 王擴の序 | 二紙 |
| (3) 本文 | | 二〇七六紙 |
| (4) 宝祐元年(一二五三) | 沈浄明の跋 | 一紙 |
| (5) 貞治五年(一二三六) | 中巖円月の重刊勸傷 | |

(6) 貞治七年(一二三六八) 彦貞の刻成記
(7) " (〃) 宗応の刊記 } 一紙

この五山版原刻本の覆刻版(国会図書館等所蔵)の内容もまた同一である。いうまでもなく五山版の特徴は、現存宋版には不明な(1)(2)(4)の宋代の序跋を有することである。五山版の書誌的特徴を宋版と比較するに、左右双辺・有界・匡廓内等の版式、毎葉一三行二四字の行格、文字の欠筆状況などすべて一致する。また版心上欄の毎葉字数の刻記も全同で、下欄の刻工名すら宋版のそれを多く遺存する。注意すべきは、宋版の卷三の丁数は第一二丁目を「十一」と誤刻し、以下卷末の四四丁目を「四十五」と順に一丁つつ誤刻するが、この誤刻さえも五山版はそのまま踏襲している。かくして、五山版は宋版を忠実に覆刻した覆宋版と断定してよい。したがって、五山版に存する(1)(2)(4)の序跋は元来宝祐元年(一二五三)刊の宋版原刻本に存在したこと、それをとどめぬ書陵部本や中央図書館本は、何らかの理由ですでに失なわれたこと等が推定される。なお、右の序跋は『会元』の撰者が大川普濟の発願による慧明首座なることを闡明にするものである。

三 さて、『会元』入蔵の最初である万曆蔵本(方冊本)、及びそれを承ける江戸期の木版本や己統蔵本等の流布本には、至正二四年(一三六四)延俊重刊の序が存し、かつて元版が存在したことを容易に推察せしめる。前述のごとく胡適はすで

に逸書とみられていたこの至正版の零本を紹介し、宋版と比較対照されている。ところで、幸にも本邦長野県松本市にある曹洞宗の名刹広沢寺には、この貴重な至正版の完本を現存する。本書は全二〇巻二〇冊、表紙は良質の朝鮮紙による補装で、タテ三〇・五cm、ヨコ一九・〇cm。延俊の序が三紙半(毎半葉一〇行一六字)に亘り、ついで本文は匡廓内、左右双辺、毎半葉一三行二四字で、この行格は前掲宋版のそれに等しい。版心は白口、「(毎葉字数) 五燈(巻数)(分類) (丁数)(刻工名)」。全体の一%ほどは補刻とみられ、各巻末には施財者の刻記が存する。全文に訓点と送りなが付され、朱引朱点が施され、欄外には時として中世の墨書書込みが存する。

本書は各冊首尾の墨書識語によれば、かつて摂州堺禅通寺の常住であつたが、広沢寺(開創時は竜雲寺)開山の雪窓一純(一三七七~一四五五)が康正元年(一四五五)に信州筑摩郡の住人、三村幸親や三沢丹波守道梅等の施財により、同等に施入常置したものである。修補の時期は、卷二十の巻末に「延徳二年辛亥七月十三日記之竜雲寺公用」とみえ、延徳二年(一四九二)に同寺二世天宙代の時と思われる。

本書の序文によれば、当時すでに旧版は焼燬していたので、会稽開元寺の大沙門業海清公が幹縁を纂り、中書省左丞相康里公等の施財により、至正二四年(一三六四)に刊行したものである。清公とは物初大観―晦機元照―業海了清と承ける大

慧宗果下六世の人。また卷一末尾の纂縁者の中には、康里公の助刊式万字をはじめ、

徑山興聖万寿禪寺住持 希顔／靈隱景德禪寺住持 輔良／淨慈報恩禪寺住持 明德 各助刊式万字

の名が連なり、更に序文の撰者たる中天竺万寿永祚禪寺住持延俊の一万字以下多くの僧俗名が並び、この元版の刊行が文字通り五山十刹をあげての大出版であつたことが知られる。

ところで、宋元両版の書誌的特徴を比較すると、版式と版心上欄の毎葉刻字数とは全同であるが、欠筆文字と刻工名とを異にする。たとえば宋版では「廓」「璉」「筠」等は欠筆するが元版では欠かず、「樹」は宋版では欠くが元版ではまちまちであるがごとである。一方、刻工名が異なるのは当然であるが、参考までに次に掲げよう。(一)内は卷名を示す。

施仲明(一)、陶中(一)、子成(四、一二)、茂叔(七、十五、十九)、古(一九)、孫(二、九、十二、十三、十六、二十)、謝(一)、用(一、四)、何(二、十六)、戈(三)、方(三、四、九)、因(四)、身(四)、辰(四)、倪(十、十三)
 「異版部分」 杭文(一一、二七、四三、三一、二一、二四、十三)、兎国洋(二一、七、十六)、屠明堂(二一、二)

右の刻工名を長沢規矩也博士の「元刊本刻工名表初稿」によつて徴すると、「子成」は静嘉堂文庫所蔵の『国朝文類』元統年間(一一三三～四)刊本中の刻工名に一致し、また「茂叔」

が「林茂叔」と同人であれば、同文庫の『宋文鑑』延祐年間(一二三四～二〇)補刻部分の刻工名に一致する。更に異版とみられる箇所存する「屠明堂」なる名も同文庫の延祐中饒州路刊本である『文献通考』の刻工名中に見出される。延祐と至正二四年とでは最少限四四年の隔たりであるから、同一刻工の従事は必ずしも不可能ではないが、異版と目される部分により古い延祐年間の刻工名がみられることは不審である。延祐ごろに宋版の補刻が行われ、その遺葉がここに混入したなどの理由にでもよるものであらうか。

さて、この元版の特徴は、前述五山版に存する(1)～(3)の宋代の序跋をもたず、代りに延俊の重刊序を有し、本文の版式が宋版に同一なること等であるが、注目すべきは本文中に重要な相違点がみられる。両版の相違箇所を対照して次に示す。

相違箇所	宋版(書陵部本)	元版(広沢寺本)
①、卷一、35丁裏 11～12行(達磨章)	達于南海、実梁普通七年丙午歳九月二十一日也。	達于南海、実梁普通七年庚子歳九月二十一日也。
②、卷一、35丁裏 12～13行(“)	帝覽奏、遣使齋詔迎請。当大通元年丁未歳也。 普通八年三月改元	帝覽奏、遣使齋詔迎請。 旧板年中崇寧詔。今依梁僧宝唱誤記。前後改云。 宋高僧正宗。十月一日至金陵。
③、卷一、36丁表 6～7行(“)	十一月二十三日居于洛陽、当魏孝明帝孝昌三年也。	十月一、二十三日居于洛陽、当魏孝明帝正光元年也。

④、卷一、38丁表
6、7行(“)

端居而逝、魏、魏文
帝大統二年丙辰十
月五日也。

端居而逝、即魏、莊
帝永安元年戊申十
月五日也。

⑤、卷一、三八丁
裏11、12行(慧
可章)

浮游講肆、偏學太
小義、年三十二、
却返香山、……

浮游講肆、偏學太
小義、年三十三、
却返香山、……

⑥、卷十三、41丁
表1、2行(同
安同本章)

師曰、露地藏白牛、
長空吞日月。

師曰、露地藏白牛、
□□□日月。

⑦、卷十六、1丁表
6行(目錄、雪竇
重顯禪師法嗣)

報本有蘭禪師不列
章次

万寿助禪師不列
章次

右の七箇所中、⑤を除いてはすでに胡適の指摘するところ。いうまでもなく、①から④までは達磨伝の年記に関する記事であるが、元版は明らかに五代に成つた燈史『統法記』と北宋の『伝法正宗記』(一〇六〇)とによつて記事を改めていることが知られる。ともあれ、右の相違箇所は『会元』の諸版の系統を知るための重要な視点となるものである。

四 上述以外の諸版は、紙幅の都合で省略するが、最後に胡適博士が最大の関心を示した景宋本についてふれよう。本書は光緒三十二年(一九〇六)に貴池劉世珩が『景宋叢書』の三として影印した一〇冊本で、(1)大川の題辭、(2)王獮の序、(3)沈浄明の跋、(4)四月の重刊勸偈、(5)彦貞の刻成記、(6)宗応の刊記、(7)本文、(8)光緒三十二年劉世珩の跋、(9)同年慈石の跋、より成る。(8)(9)は別としても(3)と(6)が本文の前にくるほかは

五山版のそれに等しい。ちなみに、近年に台北の広文書局や徳昌書院から刊行された縮冊の洋装版では(4)と(6)が省かれ、全く宋版の体裁とされる。しかし、宋版や五山版と比較すると、文字を異にする別版である。特に卷八の第三三紙には補写が存し、また版心上欄の毎葉の刻字数も宋版のそれ(元版も同じ)とは異なる。更に、宋元版に比して欠筆が著しく、刻工名の遺存が卷十に三名みえて宋版の該部に一致する。(1)の文末の印は五山版のそれと異なり、(2)には五山版にある印が存在しない点も不可解である。要するに、この景宋版なる一本は博士も指摘されるごとく到底宋版そのものなどではありえず、宋版と五山版とに基づく近代に成る宋版の模刻版と考えられる。ただし、本文記事そのものは宋版に同一とみられるから、その限りにおいて用いるべきであろう。

